組織的な地域連携の中で生徒を育み、よりよい学校を創る

――静岡県・富士市立高校の実践から考える――

学習指導要領の前文にもある通り、生徒の資質・能力の育成は、生徒や学校にかかわるすべての大人に期待される役割となっている。地域全体で生徒を育てる学校づくりを推進するためには、学校・地域・家庭の連携が欠かせないが、学校と地域・家庭は、互いにどうかかわり合うとよいのだろうか。また、どのようなことが課題になるのだろうか。教育理念の1つに「コミュニティ・ハイスクール」を掲げる、静岡県・富士市立高校の実践を通じて考える。

地域に開かれた「コミュニティ・ハイスクール」として、様々な地域交流事業を数多く行う富士市立高校。地域住民等が学校運営に参画する学校運営協議会も、継続的に活動している。

地域連携の概要

市の将来を担う人材の育成を求める地域の声に応える

静岡県・富士市立高校は、2011年の開校以来、地域の人々と協働して学校づくりを行うコミュニティ・ハイスクールを教育理念の1つとして掲げ、地域連携に取り組んでいる。

地域の未就園児との交流事業や地域のスポーツクラブと協働で行うサッカー教室、そして市役所との連携による英会話教室など、行政やNPOの協力の下、地域との交流を学校として主体的に深めてきた。近年は同校の取り組みが地域に認知され、市役所や企業の事業に高校生を参加させてほしいといった学校への依頼が増加し、積極的に生徒を地域へと送り出している。

富士市教育委員会指導主事で、富士市立高校の教育推進と広報活動を担当する滝陽介先生は、「将来の富士市を担う人材を育成したいという行政と、

将来の夢や探究心を育みたいという本校の方針が合致し、よい関係が築けている」と語る。

同校の地域連携が成功している要因は、校内の組織的な取り組みにある。

「地域連携というと、校内の教師全員の理解が得られにくく、探究学習や就職指導の担当といった一部の教師が担う単発の取り組みに終わることも多いと聞きます。本校は、地域に貢献する人材の育成を学校のミッションとして位置づけており、地域連携は、教科や分掌にかかわらず、すべての教師がかかわるものという共通認識を図ることができています」（滝先生）

富士市教育委員会 指導主事
滝 陽介
たき・ようすけ
県立高校教諭、富士市立高校教諭を経て、現職。

学校概要

静岡県・富士市立高校

開校 2011（平成23）年
形態 全日制／総合探究科・ビジネス探究科・スポーツ探究科／共学
生徒数 1学年約215人
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、茨城大、静岡大、佐賀大、都留文科大、静岡県立大、静岡文化芸術大などに11人が合格。私立大は、駒澤大、専修大、東京農業大、日本大、立教大、立命館大、関西大などに延べ155人が合格。

同校では、全学科の2年生が、富士市の課題や理想とする富士市を挙げ、その課題に対する方策や理想の実現方法を高校生が考えて企画・提案する探究学習「市役所プラン」に取り組む。

「『市役所プラン』に取り組む期間は、2年生全員が、富士市市民部まちづくり課高校生職員に任命されます。地域の人と話し合いながら活動を進める中で、地域住民の1人として、地域課題を自分事として受け止め、地域のために行動する力を育みます。そのように、地域連携は、本校の生徒、教師にとってごく身近なものなのです」（滝先生）

リアルな生徒の姿を見せて、学校改革を後押ししてもらう

すべての教師がかかわる同校の地域連携だが、地域との恒常的な連携を牽引する役割を担い、地域連携の窓口である地域交流課という分掌が同校には設置されている。多くの学校では、地域連携を専門とする分掌はなく、主担当の分掌の仕事と地域連携を兼務することになる。そのようなことで教師が負担感を覚えることがないよう、同校は担当する分掌を置いたのだ。

「外部からの連携の依頼に対応するだけでなく、連携の内容と各教師の専門性をマッチングさせて担当教師を決めることもしています。スポーツやビジネスなどの専門知識を生かして地域とつながる教師が多いことも、本校の強みです」（滝先生）

学校づくりに地域の声を積極的に取り入れているのも同校の特徴だ。中学校長やPTA代表、地域人材などからなる学校運営協議会を年3回開催し、授業見学や生徒アンケートなどを基に、学校運営への意見や感想を述べ合ったり、改善点などを提案したりしている。委員の意見がきっかけとなり、生徒の満足度が低かった土曜講座の内容を改善した例もある。

「教師も課題に感じながらも、これまで改善してこられなかったことについて、委員のひと言が背中を押してくれたことがありました。あえて平日の昼間に協議会を行うことで、授業を見てもらえるようにし、学校の真の姿を知ってもらっています」（滝先生）

図1 富士市立高校の多彩な地域連携の取り組み

多世代交流サッカー	NPO法人と連携し、同校の人工芝グラウンドを使って、地域の人々と隔週でフットサルのミニゲームを楽しむ。
ALTと楽しく話そう英会話	地域の生涯学習を推進するために、同校の生徒が市役所やまちづくりセンターと協働して行う英会話教室。
出張販売	富士市内にある児童クラブや高齢者社会福祉施設、地域の祭りなどに出張して駄菓子などを販売する。
ナイトウォーク	市役所と連携して、地元小学生を対象に、夏休みの1日、体験入学のイベントとして、夜間の学校探検を行う。
市役所プラン	同校の3年間を通じた探究学習「究タイム」の1つで、市役所が提示した課題に対する方策を考える、3科共通の2年次の必修授業。優秀班は、市役所や地域の防災イベントなどで発表を行う。
大学野球オータムフレッシュリーグの運営	ビジネス探究科の3年生が、課題研究の授業で、地域の大学野球の交流試合の企画・運営に取り組む。

※学校資料を基に編集部で作成。

地域連携の成果と展望

生徒の志望・適性と地域のニーズのマッチングを意識

地域連携が進む中、教師の意識にも変化が表れている。滝先生は、「地域から参加要請があったイベントを生徒に紹介する際、生徒の希望進路を踏まえてふさわしい生徒を各学年団に選抜してもらっています。地域の期待に応えるとともに、生徒と活動のマッチングを意識することで、生徒の進路意識の向上も図っています」と語る。

同校では、学年団が中心となって、生徒一人ひとりの志望を把握するのはもちろん、探究学習に取り組ませる中で、プレゼンテーション力やコミュニケーション力など、生徒が外部の活動に参加する際に求められる力を身につけているかどうかも見ているという。

今後は、地域の依頼に応じて生徒を参加させるだけではなく、生徒が自ら「地域のこの問題を解決したい」と声を上げ、地域に提案し、主体的に地域の問題解決に取り組む意欲や姿勢を育んでいくことが目標だ。『市役所プラン』などの探究学習を通して課題意識を高めた生徒が、主体的に地域に足を運び、探究学習に取り組む仕組みをつくりたい」と、滝先生は語る。

これから地域連携の取り組みを充実させたいと考えている学校は、地域連携の意義を学校全体で共有することが大切だと、滝先生は強調する。

「本校が組織的に地域連携に取り組めているのは、教師全員が教育理念を共有することができているからにほかなりません。どんな生徒を育てるのか、なぜ、地域連携が必要なのかを校内で議論し、共通認識を図ることが大切だと思います」

学校と地域・家庭がともに生徒を育てていくためには、学校と地域・家庭の双方にどのようなことが必要とされるのか――。

本記事で取り上げた静岡県・富士市立高校の実践を踏まえ、8月号からは、地域や家庭から見た学校の学び・生徒の姿をテーマとした連載をスタートします。ご期待ください！

地域の声　地域の大人が少しずつかかわって、生徒を育てていきたい

学校運営協議会委員
小泉彩子（さいこ）さん

富士市の地区まちづくりセンターの方から、「富士市立高校の学校運営協議会の委員になりませんか」と声をかけていただき、委員になりました。私の子どもがサッカーをしていたので、富士市立高校のグラウンドには入ったことはありましたが、それ以外では学校にかかわることはありませんでした。「市立高校と言えば、探究」といった声が耳に入ってきたこともありましたが、正直、「探究って何？」という状態でした。そのため、どんな授業を行っている学校なんだろうといった興味はありました。

実際に学校運営協議会に参加してみて、分かったことがいくつかあります。まず、私たち大人は、「どこの大学に何人合格した」といった進学実績だけで高校を見がちですが、その結果に至るまでに、先生方がいろいろな取り組みを熱心に行っていることが分かりました。今まで見えなかったものが見えたような気がして、学校が地域に発信するべきことは、進学実績以上に、学校の中の教育活動なのだと思いました。

授業見学も印象に残っています。高校生が明るく、楽しそうに授業を受けていることは、実際に学校を訪れて、普段の授業の様子を見たからこそ分かったことです。そして、気になっていた「探究」も、発表会に参加して、こういう学びが探究なんだと、私たちの時代にはなかった新しさを感じました。探究は、自分が知っている教科の授業とは全く違うもので、もっと知りたいと思いました。

学校運営協議会には、私のような教育の専門家ではない人も参加していますが、そうした多様な人が集まって学校のあり方について話し合うことで、いつも学校の中で生徒と向き合っている先生方にはないユニークな発想の意見が出てくることもあると思います。学校運営協議会が中心となって、地域の多様な大人たちが普段から生徒に少しずつかかわり、生徒を支える学校や地域になっていけばいいなと思っています。

地域連携実践リポート

「第22回 人工芝で遊ぼう」

（2023年5月18日開催）

同校では年２回、校内の人工芝グラウンドにおいて、地域の未就園児とその保護者を対象とした交流事業を行っている。スポーツ探究科の２年生とボランティアの生徒（教員志望者、保育士志望者など）が、人工芝を生かした遊びを考案し、遊具の準備から運営までを行う。生徒たちは、子どもたちがけがをしないよう、細心の注意を払いつつ、子どもたちの様子や反応を見ながら遊びの内容を変更するなど、臨機応変に対応。あちこちで子どもたちのはしゃぐ声が響き、笑顔がはじけていた。

「地域の人との交流を通して、社会で役立つコミュニケーション力を身につけたい」と、取り組みへの期待を語る生徒も多かった。

どの遊具でどんな遊びをするのかは、すべて生徒が計画。教師は見守るだけで、まさに生徒が創る地域との交流の場になっていた。

保護者の声

上の子の時から、定期的に参加しています。人工芝で遊べる機会はなかなかありませんし、大きいお兄さんやお姉さんに遊んでもらえる経験も貴重だと思います。近年はコロナ禍などもあって、人とのかかわりが薄れてきているように感じます。大きなイベントでなくてもよいので、学校が中心になって、子どもたちが人と接する機会をつくってもらえるとありがたいです。

〈青木千明さん〉

上の子２人が参加して、とても喜んでいたので、今回も参加しました。人工芝なので安全ですし、大きいお兄さんやお姉さんが遊んでくれる機会も少ないので、子どもたちにとってはよい経験になっていると思います。今回は未就園児が対象でしたが、園児や小学生が、縄跳びや鉄棒、自転車の乗り方などを教えてもらえるイベントを企画してもらえるとうれしいです。

〈望月真希さん〉

富士市の広報紙を見て、このイベントを知りました。人工芝で遊ぶ機会は貴重だと思い、今回初めて参加しました。子どもの様子を見ると、最初は緊張していたようでしたが、高校生が優しく接してくれたので、だんだん楽しめるようになっていったと思います。広くて立派なグラウンドで遊ぶことも新鮮に感じているようでした。私自身も市民として、富士市立高校をより身近に感じられるようになりました。

〈高田恭平さん〉

生徒の声

子どもたちと遊んでいると、自分たちが必要とされていると感じられるので、やりがいがあります。この活動を通して、１人でも多くの子どもが、身体を動かす遊びや運動を好きになってくれたらうれしいです。「究タイム」という探究学習の時間に、富士市の魅力や課題について調べていますが、実際に子どもたちと接したことで、さらに富士市を身近に感じられるようになりました。

〈小林晴香さん〉

準備の段階では、自分たちは何をすべきかを考え、みんなでアイデアを出し合いました。小さい子どもたちに楽しんでもらうためには、まず、自分自身が子どもの気持ちに戻って考えることが大切だと思いました。また、今回のような場をつくることで、保護者同士の交流が生まれれば、お母さんたちの負担感を減らすことにもつながります。保護者にとっても意味のあるイベントになっていたらうれしいです。

〈篠原柚葉さん〉

私は部活動では野球部に所属していますが、試合にはいつも、地域の方が子ども連れで応援に来てくれます。自分たちは地域に支えられていると感じる機会が多いので、今回は地域に恩返ししようという気持ちで取り組みました。計画から準備、運営まで、先生の手は借りず、ほぼすべてを生徒たちで行いました。子どもたちにけがをさせないことを第一に考え、どうしたら楽しんでもらえるかという視点で、アイデアを出し合いました。

〈佐藤壮琉さん〉